

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】張 嵐 (チョウラン)

【所属】(助成決定時) 千葉大学大学院

【研究題目】「中国残留孤児」のアイデンティティに関する日中比較調査

【研究の目的】

本研究は、日本と中国における「中国残留孤児」の日本永住帰国者と中国残留者の比較調査をしたうえで、三世代にわたる残留孤児の全体像を、世代、生活史上の経験、ナショナルな帰属意識の相関に注目して、アイデンティティの視点から捉え直すことを目的としている。これまで、中国残留孤児を社会科学の対象とした研究のほとんどは、マイノリティとしての彼らの適応過程や受け入れ支援体制、教育などを対象としており、しかも、彼らが抱える問題を「社会問題」として捉え、それらをいかに解決していくかという視点からの研究であった。しかし、中国残留孤児については、その生活実態や日本社会の受け入れ支援体制のみを個別に研究するのでは不十分である。本研究の意味は、帰国前・帰国後の多面的な考察を通して、総体を捉える中で、中国残留孤児の生活世界を明らかにするとともに、そこに映る日本と中国という二つの国を逆照射することにあると考えている。

【研究の内容・方法】

●研究内容

私はこれまで、日本に永住帰国した中国残留孤児一世と二世に焦点を当て、彼らが直面している困難や彼らなりの努力と“戦略”をさぐり、最後に、中国と日本という二つの国を生き抜き、二重の文化を持つ彼らのアイデンティティについて考察した。在日残留孤児のことをふまえた上で、私が何度も旧満州、現在中国東北三省(黒龍江省・吉林省・遼寧省)で行った聞き取り調査をもとに、在中残留孤児について考察し、彼らの生活実態、彼らの心情などを明らかにした。これまで、日本国内の残留孤児についてさまざまな研究がされてきた。だが、残留孤児の問題があくまでも日本国内の課題としか考えられておらず、中国国内にいる残留孤児の研究は皆無に近いのが現状である。一方、中国側では、「満州」移民が日本帝国主義の侵略の一環と位置づけられ、研究の対象が戦前と戦中に偏っている傾向がある。本研究の在中「中国残留孤児」に対する研究は日本の側のみならず、中国の側でもあまり注目されてこなかった問題である。

●研究方法

本研究では、ライフストーリー研究方法を中心に据えた。当事者が「語ったこと」のみに注目するのではなく、語り手と調査者との相互行為を基礎にした「語られ方」に注目した解釈を行うことを試みた。さらに、筆者は中国人留学生としての立場から、中国語と日本語を使い、残留孤児の話に耳を傾けてきたことが、これまでの先行研究と大きく違う結果をもたらしたと考えられる。残留孤児にとっての母国語である、中国語を使って、彼らの語りのなかから微妙な心の襞や思いを聞くことができた。語りの感情的な要素は当事者の生活世界の解釈や調査結果と大きくかかわってくると思われる。その意味で、日本人研究者の調査とは異なった形で、自らの特性を活かして残留孤児の生活世界の全体像を明らかにしたと考えられる。

【結論・考察】

本研究を通して、自ら中国に住み続けることを選択した残留孤児や、日本人であるにもかかわらず帰国できない残留孤児、そして、帰国間際の残留孤児という三つのタイプを考察した。日本政府に認定されたにもかかわらず、現在も中国に住み続けることを選択した残留孤児が中国在住を選んだ理由は「中国へのプル要因」と「日本からのプッシュ要因」を分けて考えることができる。一方では、さまざまな理由で帰国できない残留孤児には永住帰国した残留孤児と大きく違う特徴をもち、それは、彼らが「自分は日本人だ」と強く強調していることである。さらに、今になって、ようやく帰国することを決めた残留孤児らが帰国するという決断を下した理由は複雑で多層であったことを明らかにした。残留孤児三世代にわたり、そして、中国と日本との二つの国において、時間をかけて丁寧に調査したうえで、生活史、世代変容、アイデンティティの視点から考察した結果、日中両国の三世代の残留孤児の全体像を明らかにした。モデル・ストーリーの背後に隠された語りや、人々に忘れられたり、知られていなかったりする残留孤児の存在が、社会的に認知されることによって、日中相互理解の一助になったのではないかと考える。